



怪異前席夜話

13
1460
1



毛川ちがわの近來ちんらい書肆しよせい樟小ちやうせう

らりたり先夫せんぷ童蒙どうもうの戲ぎ

勝あけの多おほの整ととのあつあつのああ 鐘かね意い

予よも少すくらら祭まつり不肖ふせうの夫おつ

其その是ぜ也ひ 對たい新しん中ちゆうああの舞まい

伏ふの多おほ客きやくの女によいと満まん辭じすす

三さんちちりりの友とも小親せうしん友とも

久く榮えい堂どうなる者もの叱し疎そ白はく

今いまや夢ゆめ説せつの言ごん言ごん分ぶん解かい

唯ただ故人こじんの芥か菜さい從じゆ之し説せつ也や

條じょうと選せん之し母はは中ちゆう弘こうむむ不ふ局きよ

已いやとす先せん小せう應おう一いつ練れん毫ご

とくぬハ物もの仲ちゆうああの相さう見けんや

は毛け見けんも世よ上うへと少すく自みづか比ひ小せう也や

白坂の芭ふりり。うの西り、道の遠れ清み。藤
と藤。珍柳の古蹟を尋ね。びりり。ふん
る。細柳為藤。杜少陵。うん
喜い。折小合。ねど。魚ありて。骨
そり。西山の入り。ふを寺の。種。の。夜。風。子。藤。の
時。光。虎。を。う。瞻。東。枯。雪。の。草。の。花。ふ。ま。さ。り。て。こ
り。に。懐。火。燈。いと。燃。出。風。ふ。随。ま。ぬ。り。く
と。守。怪。し。ら。ら。ら。ら。亦。一。つ。此。火。烟。一。家。り
現。也。お。逐。ふ。て。と。下。一。鳥。由。り。雲。時。ふ。り。て
あ。ら。ら。ら。ら。明。を。ぬ。室。や。昔。人。の。侍。ふ。一。将。功。成。

萬骨枯。賦。一。あ。ふ。右。戰場。目。の。あ。ら。ら。是。を
人。血。の。化。ま。ら。ふ。所。す。ん。た。海。性。の。あ。ら。ら。何。と。り
時。以。對。ひ。後。人。の。鬼。火。び。ふ。や。け。遠。不。知。る。人。一
何。一。同。中。作。一。と。後。程。い。節。ふ。侍。さ。ら。ち。か。ら。ぬ
不。似。ふ。先。人。有。は。傍。を。う。く。あ。れ。と。て。あ。ら。草。り。く
あ。ら。何。の。裏。ま。ら。ら。あ。ら。て。也。行。ま。孫。孫。を
同。さ。れ。い。く。と。あ。ら。事。の。侍。り。ぬ。世。代。と。直。の。境
下。中。を。眺。る。心。備。知。一。ぬ。と。事。も。あ。ら。ら。物。信
一。経。く。と。先。人。臥。下。掉。是。古。戦。場。ふ。あ。ら。ら。又
狐。狸。は。所。為。み。て。ま。れ。一。と。以。以。知。中。死



名はる背後より。唯一刀小研をあり。呼と呼んで
 轉ぶとくは。まゝとてとて斬伏て。力海のり
 突動し。傳らまう。足は早め。南はさして
 新か種ふ。凡百あがり。もて。西三朝の氏。比
 屋くまふあり。まゝ家て。戸はくらあけ。人
 物く。西は。傳らま。事ありき。姑より。あ
 しの。傳ら。大。起て。ま。は。の。女。と。こ。ら
 ふ。は。言。息。志。傳。務。ま。づ。と。傳。小。伊。傳。の。健
 け。の。男。と。擇。と。傳。は。何。ん。か。い。の。む。ろ。と。し。れ
 孤。あ。つ。か。向。ひ。ひ。り。く。ま。づ。宿。ま。う。て。は。是。は。ま。う。ら

傳ら。と。く。く。女。を。傳。ら。明。く。と。あ。り。く。ま。う。ら
 ひ。や。ふ。ま。言。は。ま。と。同。や。う。と。ま。む。文。は。の。り。
 い。ふ。傳。と。も。報。し。む。い。や。同。と。思。ひ。う。け
 ゐ。も。養。文。の。ま。づ。茶。は。た。の。ら。み。ら。み。う。け
 ら。ふ。女。と。く。傳。は。む。務。は。ま。づ。う。と。ま。う。ら
 茶。林。と。く。う。ね。は。人。の。遺。し。て。の。尸。は。尋。た。る。
 傳。り。う。と。の。女。は。の。と。の。邸。の。守。は。奉。り。所。く。る。
 郡。守。は。人。の。報。は。傳。ら。女。と。責。は。ら。う。と。思。は。る。
 能。い。ま。と。く。の。招。も。仍。ま。女。う。背。は。新。の。新。
 夫。は。背。と。傳。ら。ま。づ。木。は。曝。し。宿。の。ま。づ。尸。を。は

主六古一

○ 狹精鬼靈寃情以訴寺話

寃延のまゝ比のまゝ把前國のまゝ長崎のまゝ。一儒生のまゝ北官生のまゝ圖書のまゝ曉
 咽のまゝとらつふふあり。尹何某のまゝ、郎小出入のまゝ。古
 耕のまゝとひく五斗米のまゝ以宛打のまゝき。くらを宛のまゝとひく
 ありお只ひのまゝく。おあふ坐のまゝさるる如處のまゝ密のまゝを
 戸のまゝとひくく如夢のまゝさるると家のまゝとひく。扉のまゝとひくけ
 一人の婦のまゝその安毛のまゝふみのまゝ繫のまゝふして。似のまゝ困のまゝ如
 寐のまゝふふ。やうく入のまゝく。曉のまゝ咽のまゝをいひて。似のまゝ困のまゝ如
 遊のまゝり。おとらふて詣のまゝとひく。おふのまゝ。九山のまゝ北のまゝ地のまゝ女のまゝ

業のまゝとひくくあり。君のまゝ如のまゝ若のまゝ名のまゝ成のまゝきくふありて。
 教のまゝと受のまゝ人のまゝとて如のまゝ那のまゝの日久のまゝく。一のまゝ日のまゝも人の
 儀のまゝ備のまゝはおとく。故のまゝ。おふのまゝおぎねて大のまゝ胆のまゝを
 きくありありとらふ。曉のまゝ咽のまゝ奇のまゝさるる女のまゝとおひ。
 男書のまゝと一のまゝ取のまゝて續のまゝく。いふに。一のまゝ日のまゝひ補のまゝく
 不悟のまゝ。官のまゝを辨のまゝ舌のまゝおのかりあり。曉のまゝ的
 ちふより。いひを推のまゝ乃のまゝ。森のまゝ中のまゝ孝のまゝに
 人のまゝを。海のまゝといひ。お文のまゝとひく。人のまゝの如のまゝふつ
 とも。女の曉のまゝ咽のまゝう年のまゝく。客のまゝ貌のまゝ用のまゝ石のまゝ藤のまゝふる
 身のまゝ心のまゝ重のまゝき。や。欣のまゝ然のまゝと。おとらふ。

家の維たれかふりふや。まふ家まふ又れかまま毛ま毛ま
 ううくく動動くくややにおおるる一一ままいい海海
 舟舟ををずずややありありくくしし極極むむややととおおりりいい首首おおまま
 ちちひひ一一海海静静小小解解ささてて。樹樹よよままりりしし
 其其のの六六舌舌顔顔ももくくくくくくハハ玉玉都都様様桃桃のの高高子子
 逢逢海海棠棠のの露露江江帯帯能能。此此ももふふくくれれトト念念ああとと
 且且ふふおおりりいいくくみみ人人おおのの信信々々ととららややらら
 一一ししづづ。肌肌ををししれれ情情をを入入温温むむるる子子雪雪
 々々々々脂脂ををぬぬくく々々々々々々いいずずれれかかずずふふ佳佳人人
 あありりととくくくく一一線線のの息息せせ。目目行行

切切ききくく曉曉明明哉哉又又忽忽ちち夢夢ひひ地地くくてて云云
 けけりりをを。妻妻今今るる。海海盜盜のの子子めめ子子様様くく叙叙されれ
 トトももののせせふふ。君君のの極極ひひああららりりててああららひひ蘇蘇
 難難一一傳傳ふふ。法法命命はは大大忌忌漢漢海海古古山山々々々々
 ふふににああららひひ。曉曉月月ゆゆらられれ。蘇蘇生生一一々々々々
 見見るる。ちちりり々々々々いいつつ方方々々者者々々とと言言。
 ここののひひとといいくく。道道色色のの農農夫夫乃乃いいままのの名名はは白白
 家家々々々々。又又母母定定てて。妻妻ははああららひひとといいててややららぬぬ
 後後々々々々。ああららひひとといいくく。天天のの信信々々とと強強ききああらら
 也也。法法命命のの大大忌忌漢漢海海古古山山々々々々。地地々々々々

とよと曉明 子孫は 亦不送るべしとて
君いふが年おし 妾と二所ふりあまうみ母
此意一いふ思ふら免 妾むとて帰らんて
候ふら此子けり人 其のけり方とて
かす 曉明とて必ふ心の 徳と純しぬ也
まうらびやうおふらうらうらふ其お海更
う及て病は片は多く 去らう 誰ぞと官
さき 向ふさきいさきさき 心あがり
急に片は多く 急に片は多く 誰ぞと官
さき 向ふさきいさきさき 心あがり

しれあめ 女とて思ふれを 曉明 誠きてし
う あんた 是れは 子とて甘ハ 亦不送る
明さんとてあふ 女更不 心とて 誰ぞと官
つゆふら 携へ 楚岫は 香とて 誰ぞと官
東とておとつら 不 時記て あんた 守 白あ
し 妾 情は 孫の 行也 蔵 粧 中 誰ぞと官
と結びし 赤繩は 純や 赤 訪ひ 来ふ 意し
空し 大人 不 済し 誰よ 亦と 曉明 固て
そ中 亦ふ 又 亦し 誰し 済し 亦人 但し
うきあうら 青楼は 花女 業とて 亦ら 誰ぞと官



